

アール R

2019

芸術学科の素顔をお見せします

企画を立てて入学しよう！

企画力を問う「推薦入試」を実施

こんな展覧会を企画したい

こんな雑誌を発行したい

こんな映画祭を開きたい

こんなコンサートを制作したい

多摩美術大学美術学部芸術学科では、「推薦入試」を実施しています。
問われるのは、アート・プロデュースをする力です。
応募に際しては、受験生の皆さん自身が書いた「企画書」を提出してもらいます。

出願期間・合格発表等の日程の詳細は、4月以降に大学webサイト等で発表します。
出願に関する詳細については「2020年度学生募集要項」(7月上旬アップロード予定)でご確認ください。

問い合わせ先＝多摩美術大学美術学部芸術学科研究室
(電話：042-679-5627)

かいてつくつてかんがえて

多摩美術大学芸術学科には

「芸術基礎・制作」という一年生必修の授業があり、

「つくる」→「考える」→「伝える」という

カリキュラムの根幹に位置づけられている。

ほかにもデッサンや映像作品の制作、

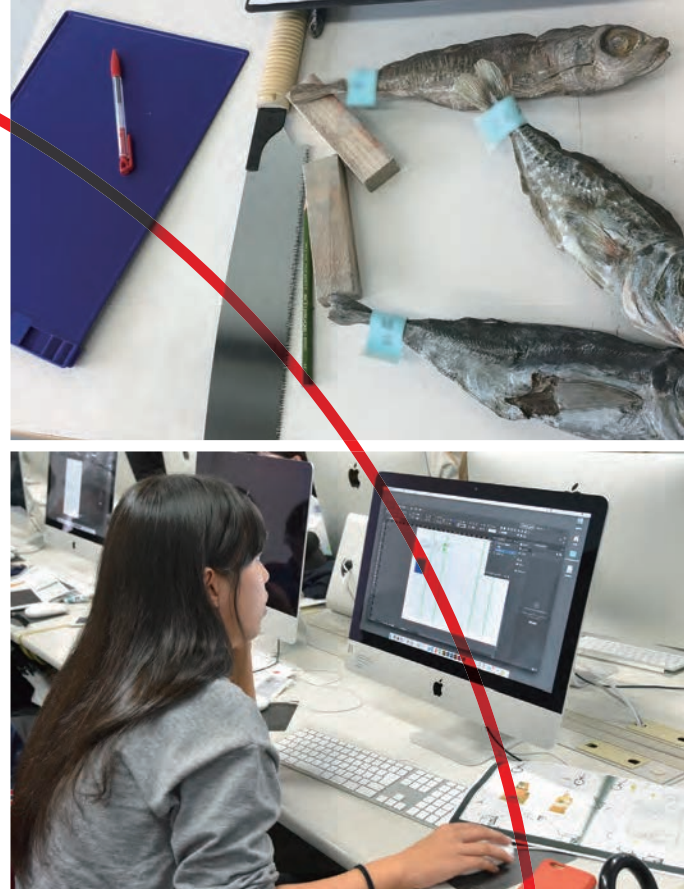
さらには書物を作る授業が開講されている。

本学科の学生たちはどんな授業でどんな実技を学ぶことができるのか。

それが考えることとどうつながるのか。

ここでは「かいて」「つくつて」「かんがえて」の

三つのキーワードを立てて本学科の特色を紹介しよう。



《芸術基礎・制作》

〈彫刻〉

《映像表現》

《映像メディア制作〈写真表現〉》

《映像メディア表現〈映像表現〉》

《文化演出の現在》

《行為と記録》

《芸術基礎・ことば》

《デザインR》

《芸術基礎・制作》

〈日本画〉

〈油画〉

〈版画〉

〈彫刻〉

《デッサンR》

つくつて

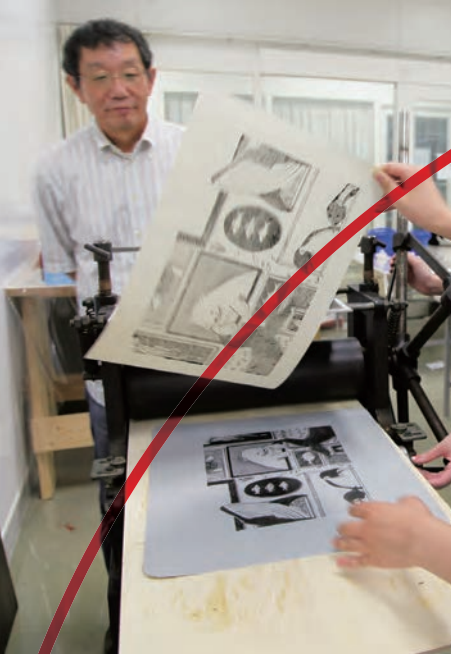
かいて

かんがえて

《制作と理論》

《言語芸術論》

《言語メディア》



芸術学科で履修できる 制作系科目はこれだ！

「いろんな授業があるのは分かったけど、
具体的にはどんな制作ができるの？ それで何を作るの？」
——そんな素朴な疑問にも答えるのが「R」誌の使命。
このページに掲載したのは、
芸術学科の学生が制作を実践できる
授業名と授業内容の一覧だ。
芸術学科の最大のテーマである「かんがえる」とともに、
気になる授業や挑戦してみたい授業を見つけてほしい。
ちなみに、ほぼすべての授業が基礎から始まるため、
「この分野の制作はやったことがない」という学生も安心だ。
得意分野を深めるもよし、初めての制作に挑戦するもよし。
授業を受けてみて、思ってもみなかった
自分の“好き”に気がつくことも。

《芸術基礎・ことば》

芸術学の基礎としての「ことば」と「書物」の本質を、エディトリアル・デザインの実践の中で学ぶ。「芸術を語るための哲学」や「思考のデザイン」をテーマに思考を深める一方で、活版印刷、パソコンを使った紙媒体のレイアウト、さらには思考を絵本の形にしたり本の装幀を手がけたりと、制作・思考・デザインそれぞれの重要性を体感する。
#アナロジー #出版への出帆

《映像メディア制作(映像表現)》

「映像はコミュニケーションの道具として機能する」という言葉を出発点に映像制作を実践し、映像によって何ができるかを考える。言葉では表せないイメージの世界と、正確に情報を伝える使命という二つのテーマの追求からは、映像表現の幅の大きさを理解する。コンピューターによる映像編集の基本を学ぶことができる。
#撮影 #ビデオカメラ

《制作と理論》

多様な美術表現に「制作」と「理論」の両面からアプローチすることで、美術にはどのような広がりがあるのか、教育において美術がどんな意味を持つのかなどを考察する。制作と自分の思考を同時に深めていく。
#制作×座学 #キュビズム

《デザインR》

中学、高校の美術科教職におけるデザインの位置づけを知り、デザインを教えるための基礎を修得する授業。「観察」「考察」「表現」を軸に授業を進め、実習課題とプレゼンテーションを行う。さらに、現代におけるデザインの意味と役割を思索し、自らの“デザインの視野”を構築する。
#暮らしのデザイン
#導く・助ける・象徴のデザイン

芸術学科の主な実技授業

《芸術基礎・制作》<日本画>

伝統的な素材、技法を知ることで、日本画制作の基礎を身につける。岩絵の具や水干絵具、胡粉などの扱い方を学ぶことから始め、箔や墨を用いて制作することでより豊かな表現を目指す。素材についての知識も深まる。
#百合 #銀箔 #杉板

《芸術基礎・制作》<版画>

銅版・リトグラフ・木版の各版種における版の構造を理解したうえで、製版や摺りなどの実践を通して版画の基本技術を修得し、版についての科学的知識や発想力を学ぶ。題材は自由なため、それぞれの作品で個性が光る。
#インクまみれ

《映像表現》

静止画像や短い動画をもとに映像作品を制作しながら編集技術を身につける授業。作る側に立つと、映像の見方が変わる。履修者は制作の実践を通して技術を習得すると同時に批評眼を養う。最終授業では、明らかな制作意図を持つアート映像作品を完成させる。
#フィルム #映像制作

《デッサンR》

鉛筆デッサンを中心とした演習を通して、見ることと描くことの連鎖を感じ取り、美術の造形表現の基礎となるデッサン力を高める。また、さまざまな思考・表現方法に触れることで対象を多角的に捉え、的確に表現する力を養う。授業は制作と講評が中心。対象を構造的に捉える力と主体的に制作する力を身につけるのが目標。
#えんぴつ #対象とにらめっこ

《言語メディア》

芸術学科を紹介する本誌『R』を制作する授業。企画、取材、原稿の執筆、誌面デザイン（レイアウト）等、編集にかかわる一通りの作業を経験する。媒体制作を通じて、取材の仕方、背景の探究を踏まえて記事を構成・執筆する力などを身につける。
#Wordとの戦い
#たすけて締め切りの神様

《芸術基礎・制作》<油画>

人物画、風景画、抽象画の三つの課題の制作を通して、油彩画の基礎的な知識と技術を身につける。実際に描くことで、絵画という技法自体への理解を深めるのが目的。絵画学科油画専攻の教員が指導に当たり、丁寧な講評も行う。
#たまび風景 #美大生っぽい

《芸術基礎・制作》<彫刻>

モチーフの観察や実制作を通して平面制作と立体制作のモノの捉え方の違いを、さらには立体制作ならではの構造感覚や空間認識について学ぶ。また、素材とじっくり向き合うことでその性質を理解しつつ、基本的な扱い方を習得する。粘土および木材による制作を通じて、彫刻の基本技術を身につけることを目標としている。
#頭部像 #にぼし

《映像メディア制作(写真表現)》

撮影の実技を通して写真の基礎知識を習得する授業。光と影、時間と空間などの考察をしながら、実際に表現する技術や方法を探る。カメラの扱い方の基本も学ぶ。
#カメラ #シャッター

《言語芸術論》

「芸術」の中にひそむ言語について考え、言語を通じて身のまわりにある「時間」や「空間」をとらえようと試みる授業。日記や手紙、詩歌、コンセプチュアル・アート、書物、建築などを、ひとつつなりに検証する。制作課題として、学生各自が生涯にわたって継続できる「記録のシステム」を考案することが課される。
#時間を生け捕りに #哲学

《文化演出の現在》(PBL*)

展示会の構造を探ることにより、現代における展示会の意味とさまざまな展示会の未来について考察し、実際に展示会を企画し実践する。現場での実務、キャプション、設置の仕方、チラシ版下の作成、広報活動、レセプションの構成について学ぶ。
#現場 #展示会



学期中・期末を問わず芸術学科の学生に出される課題の中で最も割合が多いのはレポートだろう。少ない時には月に二本、多い時には十本。芸学生のレポートは、実技の学科の学生が授業で提出する作品と同じ重みを持つ。

「芸術と鑑賞」「21世紀文化論」「芸術と経済」など本学科に多くある座学の講義は、ただ聞いているだけでは話にならない。そこからどう考えるかが重要である。レポートはいわばそのためのツールだ。学生たちはレポートを書くことで自分の頭の中を確認し整理し、新たな発想を生む。

毎年、学期の終わりが近づいて、芸術学棟三階の掲示板に貼り出されるレポート課題には、「考えたことを述べなさい」という文言が並ぶことがほとんどだ。まるで雲をつかむような話だと思える課題もある。しかし、たとえば批評家の道に進もうと思えば、作品を見てそれを言葉にする必要がある。結構雲をつかむような話である。芸術学科の学生には、何ごとにつけても日頃から「かんがえて」論理的な文章にすることが求められるのである。

「芸術基礎・制作」の担当教員であり、美術家としても活躍している海老塚耕一教授

は、学生たちに制作をする上で考えることの重要性を説く。作品を「かいて」「つくって」いく中で「かんがえる」のは、色や構図といった要素だけに留まらない。自分の手をどう動かしてどう表現すればいいのか、自分が本当に表現したいものは何なのか。それらを自問しつつ形にするためにさまざまな試行錯誤をする。時には偶然得た効果から新たな発見が生まれる。同じ空間で制作を進める同級生から刺激を受けることもある。そこでまた考える。自分の作品ももっと洗練させられるのではないかと。「かんがえる」ことは芸術の礎なのである。

文・構成＝島崎亜美、山上琴乃香
撮影＝芸術学科研究室、山上琴乃香、島崎亜美
レイアウト＝島崎亜美、山上琴乃香

・各授業の説明文は、2018年度のシラバスをもとに本誌で構成した。
・PBL（*）は、“Project Based Learning”の略。
プロジェクトをベースにした実践型・参加型の授業。全学科・全学年の学生が対象。

講座名

縄文図像学

担当教員 石井匠

美術家の視点で

縄文時代にアプローチする

二〇一八年十月某日、場所は本学芸術学科棟四階の某教室。出席確認の用紙を配った石井匠先生は、最近学外で行われた講演会やイベントの話を始めた。『土偶女子』の第一人者として知られる響田亜紀子氏との対談、石井先生が作家として展示を行った栃木県益子町の「土祭」（ひじさい）という芸術祭の紹介。プロジェクトに、若い女性などを中心

日本美術の始まりとされる縄文時代をさまざまな視点で研究する。美術家の履歴を持つ石井匠先生は、音楽を紹介するなど考古学を超えた視点で現代人にも魅力を放つこの時代にアプローチし、芸術とは何か、ものづくりとは何かを考えていく。

としたこのブームを特集した約十分のニュース映像が映し出された。激しい炎のような装飾模様をつけた縄文土器の美は広く知られているが、近年は『縄文の女神』『縄文のヴィーナス』などと名づけられるなどした土偶の造形美にも注目が集まっている。若い女性たちは、こうした動向に実に反応がよいのである。

次に紹介されたのは、チェロ奏者・作曲家の斎藤孝太郎氏の音楽だった。縄文時代の音楽が今に残っているのだろうか。何と、縄文土器や土偶に施された文様を音符に書き換え

て作曲した音楽を演奏していたのである。斎藤氏のウェブサイトで見られる動画に学生たちの目と耳が釘付けになる。出てくる音は、不思議なほど荘厳で神秘的だった。

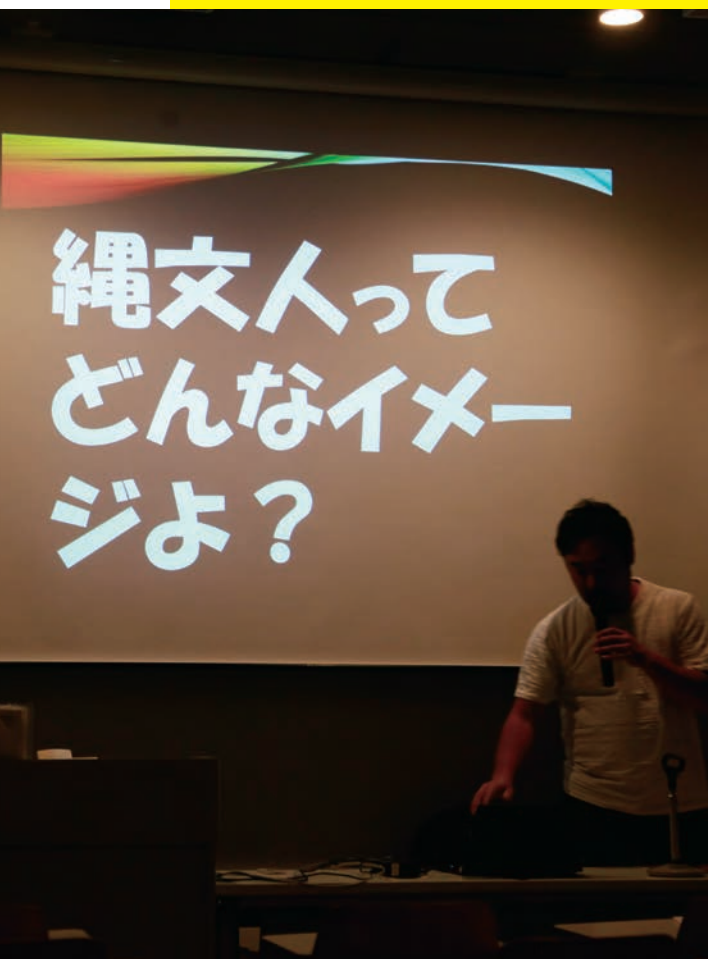
縄文研究の基本は、考古学の発掘調査だ。この日の授業では発掘作業体験者のインタビュー映像や、『新宿に生きた縄文人』市谷加賀町二丁目遺跡の発掘」と題されたドキュメント映像が流れ、地道な作業の積み重ねが縄文人の生活ぶりなどの想像を巡らせた。遺跡からは実に多くの情報が得られる。映像には埋葬や食の歴史の専門家が登場、手足を折り曲げて土に埋める屈葬と呼ばれる埋葬方法や、ドングリなどの木の実を食べていた日常など、なかなか興味深い縄文生活を解説する。約二十分の映像を見終わった後、「発掘されたものを対象に、考古学者以外の研究分野の人たちがどれだけかわっているかが分かる」と石井先生が言葉を添えた。研究においてジャンルを横断することの大切さが分かる一言だった。

考古学を専攻した石井先生は、岡本太郎記念現代芸術大賞に入選した美術家の履歴を持つ。この授業では、考古学的調査研究の成果をもとに一年以上続いた縄文時代についての理解を深めつつ、「作り手」の眼差しから縄文時代の造形物を見つめ直し、芸術とは何か、ものづくりとは何かについて考えていき



（いしい・たくみ）1978年生まれ。藝術考古学家。多摩美術大学美術学部芸術学科非常勤講師。国学院大学大学院文学研究科博士課程後期修了。博士（歴史学）。第2回岡本太郎記念現代芸術大賞入選。岡本太郎記念館企画展「生きる尊厳－岡本太郎の縄文」、国学院大学博物館企画展「いのちの交歓－残酷なロマンティズム」等をキュレーション。著書に『縄文土器の文様構造』、『謎解き太陽の塔』など。芸術・宗教・学問の領域を横断し、さまざまな活動を展開。元・現代芸術家、ペーパー神主。現在、岡本太郎記念館客員研究員。

*1



講座名

美術館経営論

担当教員 野田尚稔

美術館を成り立たせる裏側

授業は毎回「最近美術館に行った人はいますか？」という野田尚稔先生の質問から始まる。手を挙げた学生にマイクを渡した後も、「どこの美術館の、何の展覧会に行ったか。人はどのくらいいたか。展示室の部屋の広さは？ 使った設備、購入したものはありますか。不足していると感じた点は？…」など、さらに質問が続く。もちろん学生によって行く美術館は異なり、着眼点もさまざまだ。初めて知る美術館や展覧会もあれば、行ったことのある美術館でも気がつかなかったことがあるなど、学生たちはほかの学生の言葉からたくさんの発見をすることになる。たとえば、「内容は充実していたが、作品の数が多しせいとか作品と作品の感覚が狭く、人の流れに違和感があった」「もっと作家を掘り下げた展示だと嬉しかった」「バリアフリーが徹底されていた」といった具合だ。

毎回必ず同じ質問で授業を始めるのは、学生たちにいるいろいろな美術館に行ってもらいたいという思いから。「友達が美術館に行った話を聞いて、自分も行ってみようと思うことが大事。学芸員は展覧会に行かないと始まりませんから。有名であってもなくても、近くてもちよつと遠くても行く。授業が実際に足を

「美術館経営論」は、学芸員資格を取得するのに履修が必要な授業の一つ。学生たちは、美術館の理念から展覧会の企画や予算の立案、作品の扱い方まで、美術館を実際に運営していく上で必要な多くのことを学ぶことができる。

向けるきつかけになれば」と野田先生は話す。学生たちの答えを入り口に、授業の本題へ。ある日の授業は、根津美術館（東京）を

例に、作品の扱い方や企画の立案から実施までの流れを解説する内容だった。題材にしたのは、尾形光琳の『燕子花図屏風』。同館のコレクションの目玉ともいえる作品だが、常設ではなく毎年決まった時期にのみ展示され、さらに、作品の新しい魅力が感じられるよう学芸員が知恵を絞る毎年異なる展覧会のテーマを設定している。ただコレクションを展示するのではなく、さまざまな工夫をして企画展を開くことで、来館者はいつも新鮮な気持ちで作品と向き合うことができるのだ。同じ作家や作品でも、時代によって見方が

変わる。今なぜその作家の展覧会を開くのか。作品から伝わるメッセージにも変化が起きているのではないか。そうしたことを考え抜き、十分な検討を重ねて、ようやく企画が動き出すのである。

また、多くの美術館では自館の収蔵品だけでは企画内容が限られてしまうので、他館や収集家と交渉して作品の確保に奔走することも多い。輸送や保険にかかる費用を組んだ予算づくりも重要な仕事だ。一つの企画展を開くには、そうした無数の仕事と何年もの時間、多くの人々の支えが必要だが、この授業を受けてよく分かった。美術館を取り巻く制度、建築、ミュージアムショップや広告なども授業のテーマになる。



授業のお供は炭酸水 赤いラベルが授業を見守る

取材・文・レイアウト＝寛まりな
撮影＝寛まりな（*1）、芸術学科研究室

たいという。素材を中心とした視点から改めて見直しをすることで、現代とのつながりを身近な題材で理解することができるようこの講義の面白さである。それにしても、魅力的な土器や魂に響く音楽に囲まれ、木の実などを食べて日々を過ごした縄文人の世界はどのくらい平和だったのだろう。石井先生は講義の中で、「致命傷を負った人骨が複数発見されたことから、必ずしも戦争の類がなかったとは言いい切れない」と話していた。魅力的な縄文の深層にさまざまな視点でアプローチできる貴重な授業である。

授業の方針について野田先生は、「この授業名になっている『経営』については、理念的な説明をしようとして逆にイメージしにくくなるため、美術館や展覧会の具体的な出来事の解説を通して理解を深める流れにしています。また、学生たちが知らない美術館にはリアリティーを持ちにくいいため、なるべく身近な美術館を例にしています。『なぜ企画展を行うのか、どうしてその美術館で開くのか、そもそもその美術館とは何なのか』といった根源的な問いをベースに授業のテーマを決めています」と言う。作家や作品との関係で考えれば、美術館の学芸員は裏方のような存在だ。だからこそ、しっかりと理念に裏打ちされた「経営論」が必要だともいえる。

取材・文＝島崎亜美
撮影＝芸術学科研究室



（のだ・なおとし）東京都生まれ。多摩美術大学大学院絵画専攻芸術学専攻修了。世田谷美術館学芸員、多摩美術大学美術学部芸術学科非常勤講師。サントリー美術館、草月美術館を経て現職。展覧会の企画と実施を担当している。絵画、彫刻のほか、グラフィック・デザイン、インダストリアル・デザイン、建築など、幅広いジャンルの展覧会を開いてきた。

構想計画設計ゼミ

気鋭の現代美術作家たちと一緒に、一つの展覧会を作り上げる。
二〇一九年度からは、ゼミ生による作品制作も活動内容に組み込み、
ゼミは新たな境地に踏み出す。

作家への出品依頼からカタログ制作まで

美術家の海老塚耕一教授が指導する構想計画設計ゼミは、「TAMABI VIVANT II」と題した企画展を毎年開催している。昨年に会場となったのは、本学八王子キャンパス内のアートテーク・ギャラリー。金茂華、構想計画所、諏訪未知、前田精史、町田帆実、村上早の六人・グループの作品が出品された。映



「TAMABI VIVANT II」 展会場風景

像、具象、抽象など様式も技法もさまざまな気鋭の作家たちの表現はそれぞれ個性を放ちながらも、研ぎ澄まされた会場の空気の中で絶妙な響き合いを感じさせる。

副題の「Dissemination―散種」という聞き慣れない言葉は、何かを解釈するときに意味が原義を超えて拡散することを説いたフランスの哲学者ジャック・デリダの用語だという。そもそも、「美術・芸術」とはといったもののようなものなのか。デリダの言葉には、あるいはそんな難解な問いと向き合った際に答えを導き出すヒントがあるのかもしれない。実際に会場に足を運ぶと、キッチンを明るい配色で抽象化して描いたような絵画、体の一部を隠した人や犬を太い輪郭線で描いた銅板彫刻、天井高のあるギャラリー空間の床の上にくつもの黒い四角形パネルを配して小さな円形の金属のオブジェが浮くようにしたインスタレーションなどが、違和感なく共存していた。

「TAMABI VIVANT II」は、作家選びの段階から学生が行なっている。そのための画廊巡りを、海老塚教授と一緒に、ゼミの授業が始まった四月から始めたという。

美術作品を見に行く場所としては美術館が一般的だが、実は画廊やギャラリーは作家と

担当教員

海老塚耕一（本学芸術学科教授）

（えびづか こういち）1951年神奈川県生まれ。多摩美術大学大学院修了。『第6回インド・トリエンナーレ』ゴールド・メダル、『第4回アジア・アート・ビエンナーレ、バンガラディッシュ』最優秀作家賞、第15回平塚田中賞、『第19回サンパウロビエンナーレ』、『第19回現代日本彫刻展』神奈川県立近代美術館賞、FOCUS 2002『結界 海老塚耕一展』神奈川県民ギャラリー、高島屋文化賞、等々多数受賞。



「TAMABI select」展のミーティング風景。右端が海老塚耕一教授

生たちはこうして実体験で知るのである。

二〇一八年度は「TAMABI select」と題した、本学の実技学科と共同で開催する展覧会の企画・運営にも携わった。美術家の卵が多くいる学内の実技の学科と接点でき、実際に彼らの作品を展覧会で扱う作業は、極めて有意義である。

二〇一九年度からは、作品の制作をゼミの活動内容に組み込む。「制作の表現と展示の表現がぶつかり合うことで、新しい表現が生み出される」と海老塚教授は言う。芸術学科は美術史や批評などを根拠に据えた理論の学科だが、ゼミ生が作家としての体験を加えることで、「つくる」「考える」「伝える」という芸術学科の理念を実践する類例のないゼミになりそうだ。

取材・文・撮影・レイアウト＝佐藤仁奈

フィールドワーク設計ゼミ

企画を考え、アポを取って取材に出かけ、写真を撮影し、記事を執筆する。

レイアウトを行い、紙を選んで印刷会社に依頼し、発送する。

実際の出版社に近い方法で一から雑誌を作る。

パソコン、文章、イラスト、写真…

学生たちは自分の強みを生かして編集者の経験をする。

雑誌づくりの現場でゼミ生のスキルが生きる

学内のいちよう並木からぎんなんが香り立つ頃、芸術学棟四階のフィールドワーク設計ゼミのゼミ室を訪ねた。このゼミでは、企画から編集、制作の全てを学生たちが行うアート誌『Whoops!』を年三回発行している。

取材に訪れると、今年一月に発行された同誌Vol.1の企画会議が開かれていた。ところが、ゼミ生が企画書を印刷しようとする、プリンターが不具合を起こしてしまった。「プリンターのストライキか」「ここはフランスじゃないのに」「そのうちAIがストを起こす時代になるかも」

ゼミ生たちはトラブルまで楽しんでいる。担当の小川敦生教授も微笑みながら「ストをするようになったらAIも本物だね」と言い添える中で、会議が始まった。

執筆中の卒業論文に関連して西洋紋章をテーマにした企画案を出したのは、ゼミ長で四年生の板垣万由子さんだ。中でも特に動物の紋章に注目した記事を書きたいという。ゼミのオリジナルキャラクターである「タマガ



『Whoops!』のバックナンバーと、ゼミ長の板垣さんが手作りのVol.19のポップ。オープンキャンパスや芸術祭の時にティクフリーの媒体として置いた場所で威力を発揮するそうだ



ゼミ室で『Whoops!』の編集作業を進める様子。小川敦生教授(写真中央)と相談するだけでなく歓談する場面も見られ、終始和やかな雰囲気だ

いいと言われることもあります」「最近撮影OKな場所も増えていますが、確認が必要です。事前に先方に連絡して許可を取るように」とアドバイスをする場面もあった。

企画会議の様子からも分かるように、小川ゼミでは学外に出て取材をしており、過去には竹中直人や伊坂幸太郎などの著名人のインタビュー記事掲載したこともある。細かな校正や広告主との連絡なども学生が行う。「可能な限り本物の出版社に近い仕事を体験してもらおうにしています」と小川教授。

その分、苦労も多い。「原稿に編集長（小川教授）の修正がたくさん入って落ち込むことや、パソコンで行うレイアウト作業が不慣れでうまくいかないことがある」とゼミ長の板垣さん。そう言いながらも、板垣さんはVol.19の「着る・織る・染める」特集のロゴマークをパソコンで作るなど何だか楽しそう。苦労があるからこそ、

刷り上がった雑誌を手にしたときの喜びが大きいのもかもしれない。この号は川住研二さんのファッションデザインを表紙に、詩人の吉増剛造さんのパフォーマンスの写真を載せたりロックミュージシャンの尾崎世界観さんが松山市の芸術祭で行ったプロジェクトを記事にしたりと、華やかな誌面作りを実現していた。

さらに、今年はウェブに強い三年生の佐藤仁奈さんが提案した「style」というビジネスチャットを導入したことで、「仕事」の効率化をはかることができたという。メールのやり取りとは違って広告や原稿などの項目ごとにトークをまとめることができ、作業が大いにはかどったそうだ。「人数は多くないが、やる気のある生徒が集まっていてうれしい。さまざまなスキルを持つ学生がいてこのゼミは成り立っています。美大のパワーを感じます」と小川教授は言う。

取材・文＝山上琴乃香、須山琴巴
撮影＝山上琴乃香
レイアウト＝須山琴巴

展覧会設計ゼミ

試行錯誤を繰り返しながら
活動を重ねる中で、新たな展覧会のあり方を模索し、
実験的なアプローチを試みる。
大学を舞台につくりあげる
新たな展覧会の形とは。

これまでに見たことのない形の展覧会をつくる

会場内に無造作に「捨てられた」バナナの皮。誰かがそこで何らかのアクションを起こしたであろう抜け殻のようなインスタレーション。そして、不思議な空気の流れが確かに存在するトーク会場の「痕」。

昨年年初、本学八王子キャンパス内のアーテック・ギャラリーで見られた光景である。「今年は、泉太郎。」というフレーズで開催された「家村ゼミ展2018」。家村珠代教授が担当する展覧会設計ゼミでは、キュレーター主導の一般的な展覧会とは異なるあり方を模索する。二〇一八年度は、本学の卒業生であり、さまざまなメディアを組み合わせて活動を展開する泉太郎氏を迎えた。

まず展覧会名のあり方が新しい。記事で紹介するのが困難なほど長いうえ、不定期に言葉が消えたり増えたりと常に変化し得るのだ。「定まった形をもたない、突然変異をも歓迎する可能性、そのような展覧会のあり方を、泉太郎とともに探っていくと考えています」（同展ウェブサイトより）という。

美術館ではない、大学という場でできることに、泉氏もゼミ生も期待を膨らませたそう

だ。展覧会ではすべて新作のインスタレーション、しかも、作家自身が大学内の展示スペースにおいて制作することとなった。ただし、作家が大学内で制作できるのはたったの十日間ほど。その中でゼミ生は制作・設営はもちろん、作家とのやりとり、広報活動、作品展示に使用する機材の発注などさまざまな役割をこなす必要があった。

一方、会場での制作に入る前の活動として最も苦労したのが、打ち合わせの言葉の書き起こし作業だったそうだ。書き起こし作業は展覧会終了後にまとめる『ドキュメント』を作成するためのもの。主たる部分は、企画過程での泉氏との打ち合わせの書き起こし。発した言葉の通りに忠実に書くことに全神経を集中させ、音声から文字に起こす作業だけで三、四日かかったという。その後、校正の作業を行う。完全な正確さを求めるために教授や研究室の助手に見てもらい、完成するまでには気の遠くなるような時間を必要とした。「大変だった分、どうすればミスを減らし、迅速にグループワークを進められるかについて理解を深めるいい機会になった」とゼミ生は口を揃えている。



(上) 家村ゼミ展 2018 の打ち合わせをする家村珠代教授（左）と作家の泉太郎氏
(右) 家村ゼミ展 2018 会場設営風景



ゼミでの活動、特に展覧会づくりにおいては、グループワークが肝となる。作家が求める理想的な展覧会を模索する中でも、「何を、どういった目的で、誰がどのように作業を行うのが最良かを常に考え、問い続けることの大切さ」や「失敗を恐れずトライ＆エラーを繰り返してよりよいものを追求することの大切さ」を痛感する。作業は一通り終えた後、全体のバランスを見直して最後の詰めまでゼミ生それぞれの力でやり遂げなければいけない。誰も見たことがないような展覧会の新たな境地を追求するからこそ、ゼミ生一人一人が作家とも、展覧会そのものとも、さらには仲間たちとも真摯に向き合うことが大事になってくるそうだ。

会期が終わった今、ゼミ生は今年の活動で得たことを胸に刻み、泉太郎展を凌駕する、また一味違った新鮮なスタイルの展覧会を企画できるよう次の一步に期待を膨らませている。来年度はまたどのような展覧会の表情を新たに見せてくれるのだろうか。

取材・文・撮影・レイアウト＝黄夢圓

担当教員

家村珠代（本学芸術学科教授）

（いへむら・たまよ）東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科芸術学専攻博士課程修了。インディペンデント・キュレーター。1991～2009年目黒区美術館学芸員。手がけた企画展に『1953年ライトアップー新しい戦後美術像が見えてきた』展（1996年、目黒区美術館）、『小林孝亘展ー終わらない夏』展（2004年、目黒区美術館）、『家村珠代連続企画“ひとり”Vol.1、袴田京太郎』展（2005年、GALLERY MAKI）、『丸山直文展ー後ろの正面』展（2008年、目黒区美術館）など。

映像文化設計ゼミ

多くの作品を見て、感じたことを文字にして伝える。
それを基に、学生が自ら上映会を企画し運営までこなす。
西嶋憲生教授が率いる「映像文化設計ゼミ」の神髄は、
映画は見ることだけでは留まらないというその姿勢にある。

実践的に

映画の多様性を学ぶ

笑顔の西嶋憲生教授のプレートが目印の「映像文化設計ゼミ」は、芸術学棟三階の螺旋階段を上ってすぐのところにある。昨秋、とある金曜日の四限にゼミ室を訪ねた。映画のDVDが所狭しと収納された部屋には数名

のゼミ生がおり、各々が好きな席に座ってくつろいでいる。その後まもなく、資料を片手に西嶋教授が入室し、その日の授業が始まった。

このゼミには映像や映画に強い関心を持つ学生が多く集まる。三年生の大島也哉子さんもその一人だ。大島さんは元から映画好きだったが、ゼミに入ってから以前よりも映画に触れる機会が圧倒的に増え、見る量も変

わったという。「西嶋教授が企画すると、普通では体験できないことができる」と大島さんは語る。マメな性格の西嶋教授は、いつも学生たちに細かな助言をし、おすすめの映画を教えてくれるそうだ。

映像文化設計ゼミは通常、定期的に行われる金曜cinemathequeという映画の上映会に向けて活動している。学生たちが自ら映画を選び、企画運営を行う催しだ。通常は、ゼミの前半は西嶋教授と学生による談話を混じえながら上映会の打ち合わせをし、後半は上映会の実施になる。しかし取材した日は少し違った。昨年十一月の本学の芸術祭で特別上映をした「ヘンテコ映像作家 芹沢洋一郎の映画の映画」についての打ち合わせを中心に話が展開していたのである。

上映会は十一月二日と四日の二日に分けて行われた。取材に出かけた四日の上映会では、8ミリフィルムをデジタル版にした『ウゴクナ！』や『閻男』など四本と、十六ミリフィルムの『合成人間』『殺人カメラ』『ダイレクトライト』の三本の映像が流れた。16ミリの映像は、実際にフィルム映写機を使用して上映された。映写機独特の機械音と、デジタル化されていない当時のままの音声教室中に響く。さながら小さな映画館のように感じられた。その場にいた全員が息をのんで映像に見入っている。最後に上映された『ダイレクトライト』では、映像の最後のシーンが終わるとともにアルミホイルの銀幕が下りるという仕掛けが成されており、見た者全員を最後まで映像の世界に引き込んでしまう強い力を感じた。

この芸術祭特別上映は、本学科四年生の石渡冬朋さんが中心となり企画されたものだ。石渡さんは一昨年に行われた「イメーজフォーラム・フェスティバル」にて上映され

た映像作家、芹沢洋一郎の特集を見て感銘を受けたという。そこから西嶋教授の協力和芹沢氏との打ち合わせを経て、今回の上映会の実施に至ったのである。

映画を「見る」だけに留めず、人に伝えるために行動を起こす。受け身になりがちな映画鑑賞に対して、あえて能動的になる。その結果、映画の多様性を学ぶことができる。それが、この映像文化設計ゼミの醍醐味なのだ。

取材・文・レイアウト＝大谷桃夏
撮影＝大谷桃夏、映像文化設計ゼミ



担当教員

西嶋憲生（本学芸術学科教授）

（にしじま・のりお）1952年東京生まれ。東京大学文学部中退。美術出版社芸術評論賞入選を機に、70年代後半から映画・映像の研究者として執筆・翻訳。『月刊イメージフォーラム』編集長を経て現職。公共上映や映画教育プログラムの研究にもかかわる。著書に『生まれつつある映像 実験映画の作家たち』『映像表現のオルタナティブ 1960年代の逸脱と創造』（編著）、『美術×映像』『「こどもと映画」を考える』（共著）等多数。

※西嶋憲生教授は 2018 年度で退任し、19 年度から同ゼミは新任の教員が担当します。

装飾デザイン調査設計ゼミ

学生たちは各々が探求するテーマを発表し合う。仲間からの助言に向き合うことで得られる導きの一つ一つが研究を牽引する。



鶴岡真弓教授（手前右）の河合隼雄学芸賞受賞の記念にゼミ生から送られた花束とともに

過去を見て未来をつむぐ

このゼミでは、学生は研究成果を発表し、鶴岡真弓教授はもとより、ゼミ生の皆から質問や意見をもらうことで内容を練磨させていく。「好きなことを研究してほしい」という鶴岡教授の方針もあり、雰囲気はとてもリラックスしている。

「鳥居」をテーマに研究しているゼミ長の平澤直之さんは、「自分の足で稼ぐ」ことが大切」と言う。特に民俗学関係の研究は、文献だけでなく実際に関連のある土地に出かけ、残っているものや風習を見たり聞き取り調査をしたりするフィールドワークがものをいう。平澤さんはそれゆえ、時間を見つけては各地の神社に赴いているという。

授業の合間を縫って足を運ぶためのスケジュールを組むのはとにかく大変だ。その中で最近出かけたのが、鳥根県の出雲大社だった。出雲大社には、コンクリート・木・鉄・銅でできた四つの大きな鳥居がある。出雲大社は日本という国の誕生にまつわる歴史的な神社だが、大正時代にできた、歴史的には極めて新しいコンクリート製の鳥居にも、現在まで脈々とその伝統が息づいている。

平澤さんのもとと建築、インテリアに興味があり、装飾デザインを研究する鶴岡教授

のゼミに入ったという。鳥居は建築物であり、装飾的な要素も備えている。発表した時、「しめ縄はどうやって作るのか」といった純粋な質問を受けた。このような基本的な質問はありがたいと、平澤さんは言う。

研究というと個人でやっている印象が強いが、実はこうしたゼミの場で教授とゼミの仲間たちの様々な声を聞くことで、大きな広がりを持って進んで行けるのだ。

ある秋の午後、装飾デザイン調査設計ゼミの発表取材した。その日の発表者は二人の四年生。一人目の小野暢久さんのテーマは「パウ・クレーの線描画『線』の造形論と版画技法の関連」だった。独自の切り口での研究に感心した。クレーについてはドイツ語の文献が多いため、「日々の研究は語学と根気よく向き合う精神力との戦い」と小野さんは苦笑した。

二人目の鈴木尚子さんのテーマは、「あおりその深遠と神秘性の究明」。かつて在籍していた大学で専攻したテキスタイルを軸にした研究内容だ。青という色に關して、「自らの意識下において青は色を超越した存在」という考えを基軸に置き、特別な神秘性を感じて自ら製作した作品を紹介しつつ発表を進めた。その中で度々出てきたのが、「再生」や「循環」という言葉だ。「世界の様々な文様には、根底に生命循環が込められている」と語る鶴岡真弓教授との間で繰り広げられた熱い議論が印象的だった。

研究と発表で練り上げ卒業論文を書き上げるため、鶴岡教授のみならずゼミ生同士で行われる批評も熱が入る。口頭で伝えるだけでなくアドバイスや質問を記入する「批評シート」を用いた意見交換が行われる。発表と意見交換によって研究内容の充実や新たな視点の発見がある興味深い方法を目撃できた。

取材・文・レイアウト＝前山未来、

撮影＝装飾デザイン調査設計ゼミ、

森田智裕



ゼミ旅行の様子。安藤先生の解説に熱心に聞き入るゼミ生

アーカイヴ設計ゼミ

アーカイヴ設計ゼミでは、文献を読み解き、考察し、自身の言葉をゼミ生と共有して「研究」の基礎を築く。昨年の聖地巡礼は「伊勢神宮」。

文献と現場から得た知識を深く追求し、共有する

アーカイヴ設計ゼミでは、ゼミ生の論考を一冊にまとめた『Expression』という冊子を毎年刊行している。三年生はそれに向けて自由に研究テーマを設定し、年度末に一万二千字の論考を書き上げる。通常の授業の期末レポートは多くても四千字程度だから、かなりのボリュームを感じる。「一万二千字を書き切ることが、この先どこかで自分を救うことになる」と、このゼミを担当する安藤礼二教授は学生たちに説く。

授業では、特に文献を読むことに重きをおいている。一つの文献を分担して全員で読み進める。二〇一八年度は、安藤教授が監修、翻訳で携わった『言語と呪術』を用いたそうだ。それぞれが分担箇所をレジュメにまとめ、発表する。安藤教授は『折口信夫』『大拙』などの著作を持つ民俗学、宗教学分野のスペシャリストだ。

個人の研究テーマについては、各自が書いたところまでを配布し、全員で読む。研究テーマは民俗学以外からも自由に選択でき、「幻想動物と人間の関わりについて」「仏教はどのようにして日本に受け入れられたか」「『箱』の芸術、ジョゼフ・コーネルから室越健美」など内容は実に多彩だ。ある日ゼミ室



ゼミ生の研究発表を共有し、安藤教授がアドバイスする

を訪れると、三年生の彭信文さんの論考を全員が熱心に読んでいた。論題は「稲垣足穂が提示した新しい身体意識」。安藤教授もその完成度には驚きを隠せない様子だった。一方で、このあとどのような資料を参考にすればいいか、どの部分を深く掘り下げていけばいいかなど、研究の進み具合に合わせて自在にアドバイスを与えられる安藤教授の知識量にも驚かされた。

ゼミの活動は、学内だけにとどまらない。「文献を読んでおしまいではなく、研究に関係のある土地に実際に足を運び、〃全身〃で知ること大事」と安藤教授。それゆえ、地方の文化関係の遺跡や施設を訪れるゼミ旅行も大切な行事だ。昨年の夏休みは、奈良と伊

勢に足を運んだ。日本の「聖地」の代表ともいえる伊勢神宮、前期の授業で取り上げた服部幸雄の著作『宿神論』に登場する奈良県の談山神社、国宝第一号に登録された千手観音像を有する聖林寺などいくつもの神社仏閣を巡った。

秋は、東京・日比谷の国立国会図書館へ。日本で発行されたおよそあらゆる書籍が収められている国内最大級の「アーカイヴ」である。三年生の大きな課題である『Expression』に載せる論考を書くための資料集めにも最適な施設だ。ゼミ生たちがこの広大な言葉の森をどう渉猟するか。司書の案内のもと、基本的な利用方法のほかに館内に展示されている美術品の解説や普段は入ることができない書庫を見学した。そこでは見渡す限り、書籍が丁寧に並べられていた。普段はデジタルデータでしか閲覧できない明治時代に発行された新聞の現物を特別に見せてもらえるなど、自

担当教員

安藤礼二（本学芸術学科教授）

（あんど・れいじ）1967年、東京都生まれ。文芸評論家。大学時代の専攻は考古学。2002年、『神々の闘争―折口信夫論』で群像新人文賞評論部門優秀作を受賞。日本近代思想史、民俗学などをベースに評論活動始める。『神々の闘争 折口信夫論』で05年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。14年に刊行した『折口信夫』が翌年、第13回角川財団学芸賞と第37回サントリー学芸賞を受賞。その他に編著書として『初稿・死者の書』、編集協力書として『西田幾多郎』『鈴木大拙』『空海』など多数。18年、『言語と呪術』に監修、翻訳、解説で参加。さらに同年、『大拙』を著した。

取材・文＝丹羽今日子、長谷川裕子
撮影＝レイアウト＝長谷川裕子

担当教員

鶴岡真弓（本学芸術学科教授）

（つるおか・まゆみ）本学芸術人類学研究所所長。美術文明史家。早稲田大学大学院修了後、アイルランド・ダブリン大学トリニティ・カレッジに留学。ケルト芸術文化＆ヨーロッパ・中央アジア・日本に至る「ユーロ＝アジア世界」の装飾デザイン交流史を研究。著書に『ケルト/装飾的思考』『装飾する魂』『ケルト美術』『ケルトの歴史』『阿修羅のジュエリー』、訳書に『ケルズの書』など多数。企画した展覧会に2018年多摩アートテーク『始まりの線划画』。ドキュメンタリー映画『地球交響曲・第1番』でアイルランドの歌姫エンヤと共演。2018年、『ケルト 再生の思想―ハロウィンからの生命循環』で第6回河合隼雄学芸賞。



授業風景

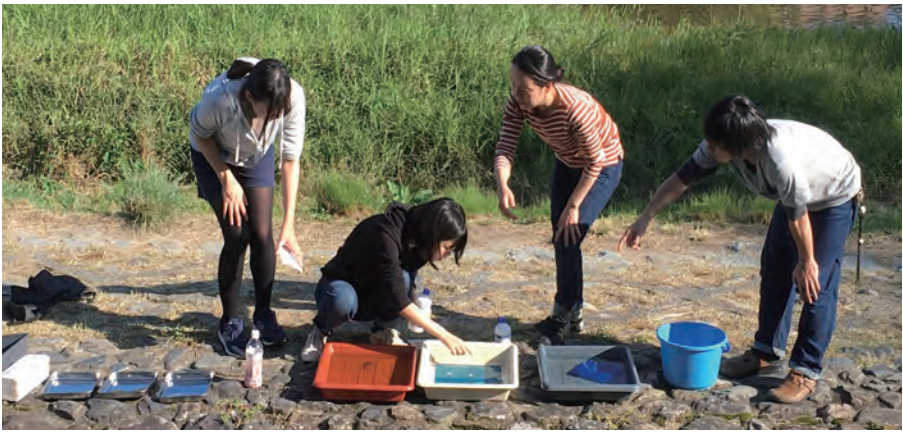
書物設計ゼミ

平出隆教授が率いる書物設計ゼミは昨年、京都の鴨川べりで貴重な体験をした。サイアナタイプという写真技術でブックカバーを制作し、さらに、コロタイプという印刷技術に挑み、書物本来の美の世界に足を踏み入れた。

触る、感じる、作る
「印刷」から「書物」まで

昨年十月、秋晴れの京都でのこと。鴨川の河川敷で数人の学生が太陽の位置を見計らいながら、金属のトレーとガラス板の間を行ったり来たりしていた。河辺では、ロープに吊るされた数枚の青い紙が風になびいている。近づいて見ると、その上に摘まれた花や草、そして三角形などの幾何学的なシルエットがついていた。

サイアナタイプ——「青写真」という呼び方のほうがより耳に馴染みがいいだろうか。スマートフォンで写真を撮るのが日常的になった現代人は、薬剤を塗った紙にフィルムの画像を感光させる暗室での作業を経てようやく一枚の写真が完成するアナログ写真の技術には、不便さを感じてしまうかもしれない。しかし、こうした旧来の技法に魅了され、利用して創作するアーティストが実は少なくない。京都で活動している写真作家の溝縁真子さんはその一人だ。詩人の平出隆教授が率いる書物設計ゼミの学生たちにサイアナ



サイアナタイプ体験風景

タイプの体験をさせてくれた写真教室「あかるい暗室教室。」の講師でもある。

サイアナタイプは古典的な銀塩写真に似ているが、焼き付ける紙に塗る薬剤が異なり、青のモノクロームで写したいものが浮かび上がる。暗室を使わず日光で感光できるので、屋外で体験することができたわけだ。学生たちはガラス板の上にモノを置き、その形が青の濃淡で浮かび上がる現象を、喜びをもって体験した。そして出来上がったのは、書物設計ゼミにふさわしく、ブックカバーだった。

最終日、書物設計ゼミ一行は便利堂という明治二〇年創業の会社にコロタイプ印刷を学ぶため足を運んだ。コロタイプ印刷とは百五十年前にフランスで生まれた印刷技術であり、手間ひまがかかるために現在では使用されることも少なくなったが、時を超えた素晴らしい表現が可能な印刷技術である。ゼミ生はコロタイプの魅力に引き込まれ目を輝かせて学んでいた。それもそのはず、書物設計ゼミの学生にとっては、印刷が極めて身近な作業だったからだ。

ゼミ生たちは毎年『10の図書館』という書籍を制作している。ゼミ生各自がテーマを立て、本を十冊選び、レヴューを記した内容だ。制作に際しては、編集や文字組みから装幀や印刷まで本造りのすべてを行う。彼らは普段の造本のことを思いながら、コロタイプ印刷の世界の入り口に立ったわけだ。

最後にワークショップを開いてコロタイプ印刷を体験させてくれたのは、京都の印刷会社の老舗、便利堂の印刷職人たちだった。ゼミ生は随時質問を投げかけながら、ローラーでガラス板にインクを伸ばし、和紙を当てて機械を回しプレスする。深みのある質感と微妙な階調で表現された印刷の仕上がりを見て、また各自質問を投げかける。彼らはまさ



便利堂コロタイプ体験風景

に真剣そのものである。書物設計ゼミのゼミ旅行は、全員に何かを吸収しようという意欲があふれていた。

取材・文・撮影・レイアウト
Ⅱ 高室勇希、彭信文

美術史設計ゼミ

解釈して、自分の言葉にする。
原書講読によって英語力と論理構成力を得る。
研究発表で自分の学びたいことを深める。

原書講読と研究発表で
美術史を学ぶ

「では始めましょうか」という本江邦夫教授の一言で場が締めまり、授業が始まった。

月曜日の三、四時限目に芸術学棟四一〇番教室で行われている美術史設計ゼミには、二〇一八年度は七名の学生が所属していた。三時限目は原書講読。今年度の教材は、『MINIMALISM』(David Batchelor 著、Cambridge University Press) という英語の書籍だった。同ゼミ三年の平田瑞穂さんによると、タイトルの「ミニマリズム」は「一九四〇年代にニューヨークを席卷した抽象表現主義の感情過多で暑苦しい側面への反動として、五〇年代半ばからアメリカを中心に展開した冷徹な感性に根ざした芸術運動」のこと。ゼミ生は一週間前に割り振られた箇所をあらかじめ和訳しておき、授業では英文と自分の訳を一文ずつ読んでいく。本江教授はまず発音を正し、英文法に則った構文の説明を加える。教授が合間に挟む美術史の解説は必聴だ。この日は二十世紀初頭にブラックやピカソがフランスで創始した芸術運動「キュビス



取材した週の直前に誕生日を迎えた本江教授。抱えているペンギンのポーチは、ゼミ生全員からのプレゼントだという

ム」について、わかりやすく説明していた。

実際に原書と向き合っていると一般的な日本語には訳されていない単語もあり、教授も学生も手探りで訳している。最初から答えが準備されているわけではないのだ。そこに質問の基本姿勢があることを改めて感じる。あるゼミ生に、教授がこんな質問をした。「訳はその通り。言いたいことは何?」。文章の著者が何を伝えたいかが表れていなければ翻訳の本来の目的を果たしていないということに思いついた。他大学では研究発表が主で原書講読はなかなか行われないうえ、卒業生にも評判がいいという。

「英語が読めれば世界中から知識や情報を得て吸収することができる。さらに、論理構成力を養うことができる」と教授は言う。ただ語学力をつけるためだけでなく、研究者のあり方の基本を学ぶ授業であることに感慨を覚えた。

四時限目は研究発表である。毎回二人の学生がテーマを決めて発表した後、学生間で質

疑応答が行われる。この日は四年生の福島麗さんがフィンランドの建築家アルヴァ・アアルトについて、鍾欣穎さんが米国出身のコレクター、ベギー・グッケンハイムについて取り上げた。福島さんはアアルトの生涯について発表。参考資料として大型本を五冊ほど持ってきていたほか、神奈川県立近代美術館葉山で開催されていたアアルトの展覧会の様子をリポート。金遣いが荒かったため旅行は予定より一週間切り上げたというエピソードなども紹介した。福島さんはもともとフィンランドの児童文学『ムーミン』の作者トーベ・ヤンソンを研究しており、同時代を生きたアアルトについて調べることで両者を結び付けられなかと考えたという。

このゼミでは学年末に毎年論文集を刊行しており、卒業論文への足がかりになることもあるという。発表するだけでなく内容を論文にまとめるのは相当な苦勞が伴うはずだ。その分、学生たちの実りも大きいのではないだろうか。

取材・文・撮影・レイアウト 降幡ひかり

担当教員

本江邦夫 (本学芸術学科教授)

(もとえ・くにお) 1948年松山市生まれ。小中学校時代のほとんどを北海道で過ごす。76年東京大学大学院修士課程修了。同年東京国立近代美術館に入り、マティス、ルドンなどの回顧展を手がける。他方、『黒田アキ』展、『辰野登恵子』展など、現代美術にも意欲的にかかわる。98年多摩美術大学に転じる。主な著書に『●▲■の美しさって何?—20世紀美術の発見』、『絵画の行方』、『オディロン・ルドン』など。

※本江邦夫教授は2018年度で退任し、19年度から同ゼミは新任の教員が担当します。

担当教員

平出隆 (本学芸術学科教授)

(ひらいで・たかし) 1950年福岡県生まれ。一橋大学卒。詩人・作家・批評家。その詩は散文の領域に及び、『胡桃の戦意のために』(芸術選奨文部大臣新人賞)、『左手日記例言』(読売文学賞)、『猫の客』(木山捷平文学賞、New York Times Bestseller、Sunday Times Bestseller)、『ベルリンの瞬間』(紀行文学大賞)、『伊良子清白』(芸術選奨文部科学大臣賞、第42回藤村記念歴程賞) 自装で違本装幀コンクール経済産業大臣賞、ライプツィヒ・ブックフェア「世界で最も美しい本」賞候補)、そして2018年の新刊・自伝的回想録『私のティアーガルテン行』など多彩。

東京国立近代美術館主任研究員

三輪健仁 さん

展覧会を一過性の「パフォーマンス」として捉える

多摩美術大学大学院在学中から「記録」と「表現」の関係と向き合い、思考を深めて来た三輪健仁さん。

現在は東京国立近代美術館で主任研究員を務めている。

展覧会は一過性の「パフォーマンス」だという。

美術館での経験が培った独自の視点について語ってもらった。



二〇一八年に東京国立近代美術館で開催された『ゴードン・マッタ＝クラーク展』は、チェーンソーで切断した一軒家をはじめ既存の建築を変容させる行為を、主に一九七〇年代のニューヨークで提示するなどの作家

の、アジア初の回顧展だった。また美術における「作品」とアーカイヴ性の高い「資料」の序列を問い直すとともに、閉鎖的な側面を持つ美術館が、いまなお一般社会と接続しうるかという問題を提起する展示でもあった。



『ゴードン・マッタ＝クラーク展』（2018年）会場展示風景（*）

絵画や彫刻の展示を基本としてきた従来の美術館は、一見「静的」で揺るぎがない空間のようにも見える。この企画展を担当した同館主任研究員の三輪健仁さんは、仮設的で、一過性の展覧会を持つ「動的」な特性を使って、美術館の空間や制度に揺さぶりをかけていきたい、と話す。

三輪さんは東京外国語大学英米語学科を卒業後、学部時代から興味を持っていた美術について学ぼうと、本学の修士課程・博士後期課程で研鑽を積んだ。修士課程では、スイス出身の画家パウル・クレーについて研究をする。特にハイ・アート、ロー・アートの区別を軽々と飛び越えるようなクレーの美術に対する向き合い方に大きな影響を受けたという。また同じ頃興味を持ったのが、一九七〇年前後の美術。展覧会の時代、とも言われるこの時期の美術への関心は、現在固定化しつつある美術館の展覧会という形式を、再び流動化するためのアイデアを考える際に役立っているという。〇九年に開催した『ヴィデオを待ちながら一映像、60年代から今日へ』や一五年開催の『Re: play 1972/2015—映像表現'72』展、再演『展は、そうだった大学時代の関心が展示に結びついたものだ。いずれも七〇年前後の映像表現を中心的に扱った展覧会だが、「記録と表現」というテーマにフォーカスしたものだという。「この時期のヴィデオやフィルムによる映像作品はしばしば退屈で、表現性の欠如した“単なる”記録というレッテルを貼られることがあった。でも表現性がゼロの記録も、記録性がゼロの表現もあり得ない。記録と表現、あるいは資料と作品は二者択一、二項対立的にあるわけではなくて、問われるべきは、優れた記録性や優れた表現性、だけです」と三輪さんはいう。

一九七二年に京都で開催された映像のイン



『14の夕べ』（2012年）開催前に制作されたチラシ

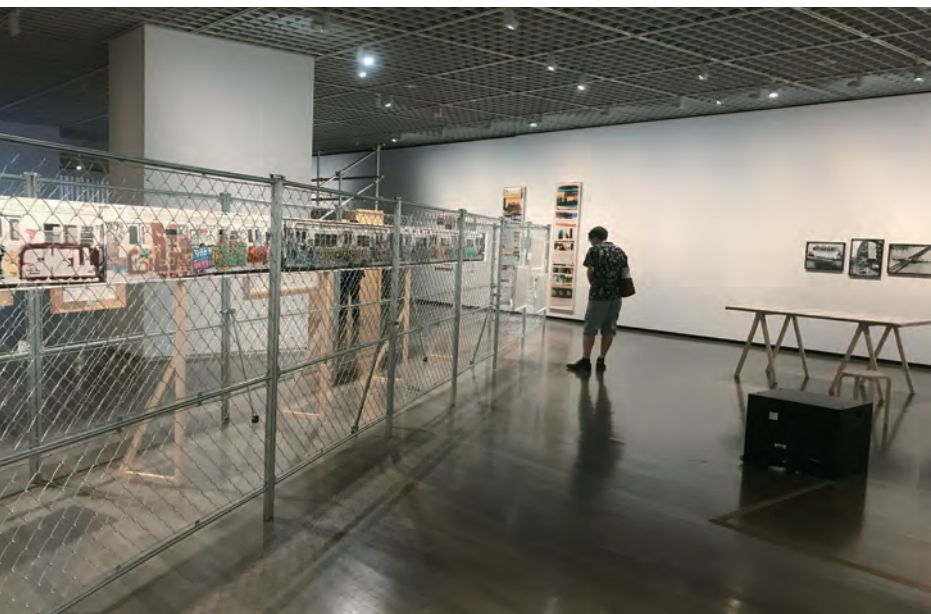
毎夕異なるアーティストが、異なる舞台設定でパフォーマンスを行った。各プログラム後はセットをその日のうちに解体し、翌日の午前中には次のセットを準備するという目まぐるしい毎日に追われたという。そして終了後、一年以上かけてこの催しの記録集が制作された。その日、その場限りで消え去る十四のパフォーマンスを、書籍上にどう残し得るのか。美術館が「一過性」の出来事をいかに扱うかという問題に向き合い、また「記録」と「表現」のあり方についての考察を深める機会になった思い出深い企画だという。

現在、三輪さんは同館でコレクションの管理を担当する部署に所属している。この仕事の中で浮上してくるのは「保存」の問題だ。作品を変えることなく安全に保管し、次世代へと継承していくことは、ある意味では展覧会を持つパフォーマンス的な側面とは相反す

スタレシオン展を、四十数年振りに、会場の空間も含めてまるごと再現するという『Re: play 1972/2015』展では、「展示」を演劇における「再演」になぞらえることで、展覧会を持つ「いま、ここ」という現在性や、動的な「パフォーマンス」としての側面を浮かび上がらせようとしたともいう。

この「パフォーマンス」へのフォーカスは、二〇一二年に開催した『14の夕べ』という企画に端を発するものだという。「14の夕べ」という催しは、約千三百平米のギャラリイを会場とした連続十四日間、総勢十六組のアーティストによる日替わりのパフォーマンスイベント。美術、ダンス、音楽、演劇、詩、

『ゴードン・マッタ＝クラーク展』（2018年）会場展示風景（*）



『14の夕べ』の開催1年後に「記録」として出版された書籍

るようにも思われる。展示という動的なパフォーマンスによって美術館を常に活性化すること、そして同時に、モノを残すという美術館の根源的な役割の精度をより一層上げること、日々そんな困難な課題と向き合いながら、美術館のあり方を探っている。

取材・文・撮影（*）・レイアウト＝黄夢園

（みわ・けんじん）東京国立近代美術館美術課主任研究員。一九七五年生まれ。東京外国語大学外国語学部英米語科卒業後、多摩美術大学大学院美術研究科修士課程・博士後期課程中退。二〇〇二年から現職。これまで企画した主な展覧会、イベントに「ヴィデオを待ちながら一映像、60年代から今日へ」（9）、「14の夕べ」（12）、「Re: play 1972/2015」（映像表現'72）展、再演『展は、そうだった大学時代の関心が展示に結びついたものだ。いずれも七〇年前後の映像表現を中心的に扱った展覧会だが、「記録と表現」というテーマにフォーカスしたものだ。という。この時期のヴィデオやフィルムによる映像作品はしばしば退屈で、表現性の欠如した“単なる”記録というレッテルを貼られることがあった。でも表現性がゼロの記録も、記録性がゼロの表現もあり得ない。記録と表現、あるいは資料と作品は二者択一、二項対立的にあるわけではなくて、問われるべきは、優れた記録性や優れた表現性、だけです」と三輪さんはいう。一九七二年に京都で開催された映像のイン

ミュージシャン、スクリーマー

JUNKO さん

「非常階段」でスクリーマーとしてデビュー
ヨーロッパではソロ活動を展開

本学芸術学科の芸術学科の第二期生として、
在学中の講義では
先端の現代美術に触れていたJUNKOさんは、
人間の究極の叫びで音楽を表現する
「スクリーマー」として活動を続けている。
海外でのソロライブには、
なけなしの金をはたいて
聴きに来るホームレスもいるという。



昨年十月中旬、東京・雑司が谷のある店の
一室で一人のミュージシャンが来るのを待つ
ていた。引き戸が開く音がしたので視線を向
けると、本誌のインタビュを快く引き受け
てくれたJUNKOさんが姿を現した。
フランスなど海外を中心に活躍しているJ
UNKOさんはあるとき、「言葉のような
言葉でないような声を発する」叫びの発生に
えも言われぬような魅力を発見し、それ以
来「スクリーマー」（直訳すると「叫ぶ人」）
として活動が続けている。

実は、初めてJUNKOさんの曲を聞いた

時は、究極の叫びを追求したと思われる独自
の声で電子音のように聞こえた。あるいは、
こうも言えるかもしれない。JUNKOさ
んはあたかも人が作った一個の「楽器」の
ように全身を機能させていたのではないか、
と。ライブではしばらくの間その声を聴いて
いると、電子音に聴こえていたそれが次第に
魂の叫びであることに気づき、こちらの心も
震え始めたのである。

JUNKOさんは、本学で一九八一年に創
設された芸術学科の二期生だ。JUNKOさ
んが在籍している間は、現在の芸術学科で学

ぶことができるような「ことば」の講義など
はなく、アクション・ペインティングやパ
フォーマンス芸術について熱心に学んだとい
う。当時、批評家として現代美術の世界で大
きな存在感を示していた教員の東野芳明氏ら
の講義は、さぞ気合いの入ったものだった
のだろう。授業で、イタリアの美術家ルー
チオ・フォンタナの切り裂かれたカンヴァス
を模して制作したこともあれば、教員が学生
を学外の喫茶店に連れ出して講義をしたこと
もあったそうだ。昭和という時代の空気を感
じさせ、今の学生にも興味深いキャンパスラ



michel henritzi さんとのアルバムジャケット

イフである。
JUNKOさんが音楽を始めたのは、ノイ
ズバンド「非常階段」のJ・O・J・O・広重さんに
誘われたからだという。JUNKOさんは
一九八二年から「非常階段」のメンバーとし
て国内で活動を続けた。そして、二〇〇二年
に転機が訪れる。ギタリストの michel henritzi
さんがソロアルバムのリリース話を持ちかけ
たのだ。話を受けたJUNKOさんはフラン
スで録音をし、その足でヨーロッパツアーを
決行。「非常階段」のメンバーとしての活動
に加え、ヨーロッパを拠点にしたソロ活動が
始まった。
海外での活動の中では、ノルウェーの教会
とフランスでの広大な森で行ったレコーディ
ングが特に印象に残っているという。森は回
りきるのに車で七日間もかかるほどの広さ
だったそうだ。森の中であの声を聴くと、ど
んな感興が胸の中に湧いてくるのだろう。想
像するだけでわくわくする。

それにしても、音楽界の慣行や聴衆の反応
が日本とは異なるであろう海外での活動に不
安はないのだろうか。海外では公演先で機材
が揃っていないこともざらにあるという。J
UNKOさんは穏やかな顔で、「michel henritzi
さんがいるかぎり、安心して活動できる」と
いう。ソロのミュージシャンも一人で活動で
きるわけではない。いかに信頼できる人と一
緒に仕事ができるかが大切であることが分
かった。

本学科の出身ということ、JUNKOさ
んに自身の中で音楽に対して美術が与えた影
響について尋ねてみた。深く考えたことはな
かったそうだが、思い返して見ると、海外で
のライブはしばしば現代美術系のギャラリ
や美術館を会場にできたという。ミュージ
シャンの公演はライブハウスでという型から
おそらくごく自然にはみ出していること自体
が興味深い。そもそもパフォーマンスはア
ートである。破天荒な表現の数々を取り上げた
授業の内容が潜在的にでもJUNKOさんに
訴えかけ、その独自の表現を生み出したのだ
とすると、それもまた興味深いことである。

ヨーロッパの田舎町で活動が続けてい
ると、畑しかないカントリースाइドの納屋のよ
うなところから、駅近くの小さなライブハウ
スまで実に多様な場所を公演会場にするよう
になったという。中には、車でしか来られな
いような場所でライブをしたことがある。そ
の時には、JUNKOさんは「こんなところ
まで、お客さんがたくさんくるのだろうか」
と思ったそうだ。

だが、それは杞憂だった。車で来る客はも
とより、バスをチャーターしてくるグルーブ
まであったというのだ。「母親が病氣なんだ」
と言って会社を休んで来た人もいれば、なけ
なしの金をはたいて聴きに来たホームレスも
いたという。日本では想像がつかないような
ことが、ヨーロッパではある。それもまた文
化なのだろう。

取材・文・レイアウト＝田波奏平
撮影＝川崎るい



ライブ中のJUNKOさん

（ゆんこ）一九八二年に多摩美術大学芸術学科二期生とし
て入学。同年、「非常階段」に加入する。現在、日本では「非
常階段」のメンバーとして活動。海外ではヨーロッパを中心
にソロ活動を続けている。



フランスの広大な森でレコーディングするJUNKOさん

PRコーディネーター

市川靖子 さん

「多くの人の幸せ」を願って仕事に臨む

本学科の大学院修士課程を修了後、フリーランスでPRコーディネーターとして活躍してきた。美術館の広報も経験し、現在は地方自治体のPRも積極的に行っている。



「PRコーディネーター」は、芸術祭などの催しと深いつながりを持つ。しかし担っているのは単なる宣伝には留まらない。アーティストと観客をつなぐ。それが市川靖子さんの考えるこの仕事の神髄である。

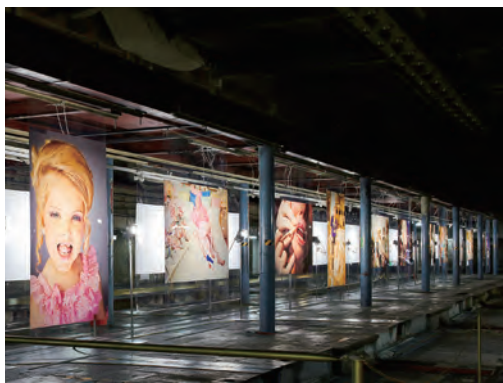
本学科の大学院修了後、レントゲンヴェルケという老舗の現代美術ギャラリーのスタッフだった時期が二年ほどあった。その際に東京・神楽坂のアグネスホテルを会場にした

トフェアだったことから新聞、雑誌、ラジオ、テレビで取り上げられるなど、大きな反響があった。参加したギャラリーのスタッフやアーティストと一緒に仕事をしたこと、ここでプレス関連の人脈が広がったことが、現在の市川さんの仕事の基盤になっている。その後しばらくの間はフリーランスとして活動していたが、二〇一六年に横浜市横浜美術館で広報担当の職員を務める。地に足をつけて仕事をするため、より若い世代に広報のノウハウを伝えるため、そして、それまでに得てきたプレス関係者の人脈を活かしたいという明確な理由があった。だが、実際に働き始めるとフリーの時の違いに困惑する。美術館の広報の仕事には制限が多く、人脈も活かせなかったのだ。一方でこんな思いが募った。「生きている作家、生きている人のPRをしたい」。フリーの仕事を再開した。

最近、地方自治体からのオファーもあり積極的にPRを行っている。昨秋大分県で開催された「国民文化祭／全国障害者芸術・文化祭 おおいた大茶会」もその一つだ。一般市民による文化の発表会を中心に、世界的に著名な美術家アニッシュ・カプアアのメインプロジェクトなど、さまざまなプログラムが大分県内全域で行われた。

市川さんが広報ディレクターとして携わったのは一昨年から。いかんせん、「おおいた大茶会」の全国での知名度は低かった。市川さんは、自分の専門だった美術にとらわれずに大分県全体を広くPRすることにした。吉本興業の全国区のタレントを雑誌の特集ページに起用し、大分県の面白さや楽しさを誌面で紹介するなど、美術に関心のある層だけでなく、より多くの人に目を向けてもらえる工夫をし、集客につなげた。

市川さんは、「多くの人が幸せになるよう



毎年春に開催する「京都国際写真祭」の展示風景。
第一回目からPRに携わっている
photo by TAKESHI ASANO

（いちかわ、やすこ）多摩美術大学大学院芸術学専攻修士課程修了後、アグネスホテル勤務の後、ART@AGNESの事務局長を担当（2006〜09）。その後、あいちトリエンナーレ（10、16）、アートフェア東京（11、15）、ヨコハマトリエンナーレ（11）などのプロジェクトで広報事務局を担当。京都国際写真祭（13）、映画「ハープとドロシー」二人からの贈りもの（13）、国東半島芸術祭（14）、混浴温泉世界（15）で広報を担当。横浜美術館広報部に在籍した後、「第33国民文化祭・おおいた2018」の広報ディレクターに就任。18年3月にアートを専門とするPR会社「株式会社いろろ」を設立。

歴代『R』

本誌『R』の歴代の表紙を並べてみた



コレクション

二〇一四年に創刊され、一九年版で六冊目。四号で一度デザインが変わった。一四〜一六年版はシックで落ち着いた、重厚感のあるデザイン。一七年版以降はシルエットを生かした青と白のコントラストが目を引く。雑誌を開いてどんと裏返し、表紙側を見ると、裏表紙にまでまたいで本をかたどったデザインがどこかにあることがわかる。同じコンセプトを踏襲したこの号でも、ぜひ確認してほしい。

「創刊号で雑誌名のロゴをわざわざ印刷して芸術学棟の中に貼り付けて撮影して写真で見せるというアイデアの斬新さには驚いた」と、創刊以来編集長を務めている本学科の小川敦生教授は話す。人の目を引くために文字をたくさん載せることが多い雑誌の表紙の中で、本誌は誌名、発行年、発行者名のほかに一行のコンセプト文があるだけのデザインだ。しかし小川編集長は、「仮に書店に並んでも一般の雑誌に引けを足らない」と考えている。特に現在の青と白のみで構成されたデザインは、「究極のシンプル美を創出しているのではないか」という。

その表紙を毎号担当しているのは、本学科の授業「芸術基礎・ことば」でも教鞭を執るブックデザイナーの須山悠里先生。この記事の取材に際して、次のような言葉を寄せた。

アルファベットが「文字である時、そこには一文字であるがゆえの広がりがあると思う。」

一文字では意味を見出せないはずの文字が、どこかに置かれる時、その空間、物質が、文字に奥行きを与える。

例えば、小説の中に置かれる「X年」「Y市」「Z氏」はどこか不穏で、しかし引力のある空気を帯びるし、古く寂れたドアにかけられた看板に、小さく「I」とあれば、私はついノブに手を伸ばしてしまうかもしれない。

もちろん、「R」もいたるところにある。様々な単語の中に、街に響く音の中に、普段気がつかないほどに、私たちの日々に入り込んでいるだろう。

ひっそりと姿を隠していた「R」は、ある部屋の表札に、本の顔に、または夥しい数になって頁の中に現れた。

しかし、ある時にまた「R」は姿を消して、「R」に広がりを与えたはずの空間や物質もただのネガポジの光と影を残すだけとなった。

もう少ししたら、また「R」に声をかけても良いかもしれない。

実は記事を書いている時点ではまだこの号の表紙はできていない。製本されたときにいったいどんな顔を見せてくれるのか。わくわくしている。

取材Ⅱ島崎亜美、降幡ひかり
文Ⅱ降幡ひかり、島崎亜美



原稿に間違いがないかどうかをチェックするために印刷された校正紙。
誤字脱字を入念にチェックする



取材の担当を決める学生たち。
取材する人物は、各学生、教員、研究室の助手たちがアイデアを出し合って決める



パソコン上で写真を貼り付け、原稿を流し込んで記事のレイアウトをする様子。
Adobeの「InDesign」というソフトを使って作成する



学生記者が書いた原稿の修正指導は、
ワープロソフトの変更履歴を表示する機能を使って行われている。
写真は、このコラムの原稿に編集長の小川敦生教授が赤字を入れたもの

印刷を委託している会社、八紘美術の印刷風景



製本を委託している高村紙工所の製本風景。
『R』の印刷部数はおよそ2万部。製本を終えるのに2〜3日程度かかるという



編集会議／企画の決定

取材

記事執筆

記事提出

編集長による確認と修正

完成原稿の作成

レイアウト

取材先による確認

校正

デザイン監修者による確認

印刷会社への入稿

色校正

納本



芸学生が自ら取材、誌面で本学科の素顔をあらわに

納本され、積み上げられた『R』

本学芸術学科には、小川敦生教授が担当する「言語メディア計画」という授業がある。本学科発行の雑誌『R』を一から制作するのが、授業の内容だ。

『R』は、学科の素顔を学生たちが自ら明らかにしようという自己確認の媒体だ。制作は、「学科の素顔を見せるためにはどんなコラムを作ればいいか」「どの授業を取り上げたいか」などを決める編集会議から始まる。二〇一五年度の授業を受けたのは主に一、二年生。以前『R』の制作に携わったことのある四年生も参加した。学生が提案した企画案の検討をする一方で、どのゼミあるいは授業を取材したいかといった希望を取り、担当を決める。取材の手法などは新聞および雑誌の記者や編集長を経験した小川教授が事前にレクチャーする。しかしうかうかしてはいられない。たとえば取材対象の卒業生はたいてい仕事に多忙ゆえ、ゆっくり構えているとタイミングを逃すおそれがある。学生記者たちは電話やメールでアポイントを取り、授業が始まって一カ月も経たないうちに取材に走り始める。

取材では対象の人物に質問をして答えを聞くだけではない。この媒体では写真も重要だ。たとえば「ゼミの舞台裏」のページの担当であれば、対象のゼミの本質を表しつつ、読者が注目して本文を読みたくするような写真を集める必要がある。インタビュ風景や職場、ゼミ室の様子を撮影するほか、ゼミ旅行に行った時の写真でいいものはないかといった相談もする。

本学科が発行している雑誌『R』は、二〇一四年の創刊以来、本学科を卒業した人々や八人の専任教員が担当するゼミの内容を在学生在が記者として取材、執筆し、記事にしてきた。ここでは、その『R』がどのようにして作られているかを改めてリポートした。

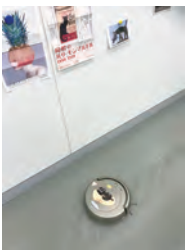
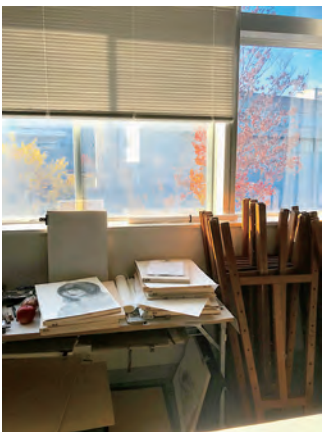
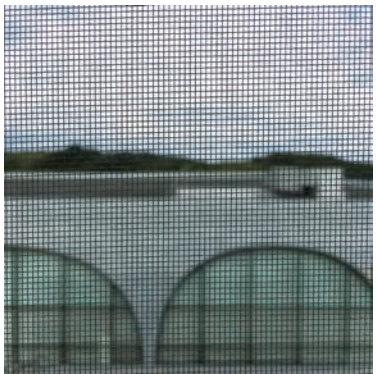
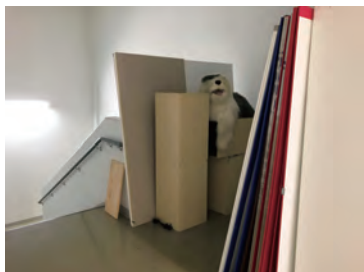
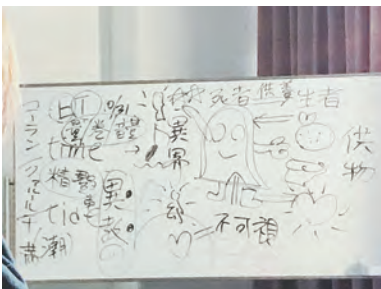
次はいよいよ記事の執筆だ。いつどこで何をといった「5W1H」を書くことや情景描写の具体的な方法などについてのレクチャーは受けたものの、実際に筆を執るのは難しい。苦労して書き、提出すると、『R』の編集長でもある小川教授による原稿の修正指導が行われる。以前の出版界ではプリントされた校正刷りに赤ペンで指摘が書き込まれるのが普通だったという。『R』ではパソコン上の原稿ファイルに小川教授が修正を赤字で書き込む。もともとの原稿が見えなくなるくらいに真っ赤な指摘で埋まって戻ってくることもしばしばだ。修正を学生が原稿に反映し、再度提出。ゴースインが出ると「完成原稿」として、今度はレイアウト作業に移る。

レイアウトはパソコン上で専用のソフトウェアを使って行われ、記事の完成原稿と集めた写真を組み合わせながら誌面のイメージ上に貼り付けていく。同時に取材先や関係者などに原稿の内容に間違いがないかどうかを確認してもらう。さらに校正を重ねる一方で、デザイン監修者の須山悠里さんにレイアウトのチェックをしてもらう。問題がなければ印刷会社に入稿する。最後に記事の写真等の色が間違っていないかを確認する「色校正」を行ない、ようやく印刷会社での印刷が始まる。そして納本。こうして初めて多摩美術大学芸術学科発行の雑誌『R』が完成するのだ。

文〓 椋田大揮
撮影〓 遠藤菜摘

夢を六六六

芸術学棟とその周辺のふとした風景を集めてみました。



撮影：大谷桃夏、島崎亜美、算まりな、降幡ひかり、森田賢裕、彭信文、山上琴乃香、前山未来、小川敦生、芸術学科研究室



▼自分のやりたいことや研究したいことを自由に学べるのが芸学の好きなところ。さらに、自分以外の人がどんな研究をしているのかを知ることによって、自分の知識の幅が広がります。卒論論文を書き上げる際も、指導担当の教授が親身になって考えてくださるので、自信を持って自分の研究に打ち込むことができました。芸術学科で学ぶ過程で得たものや、出会いは私にとってかけがえのないものだと感じています。(寛まりな)

▼私は芸学の学びやすい環境が好きです。座学、制作などを通して生徒一人一人それぞれが興味のあることを自由に発見して学べるのは多摩美の中でも芸術学科だけなのではないかと思っています。この自由で興味のある事を見つけやすく、発見したら全力で打ち込めるその環境こそが芸学の魅力であり、そのような環境があるおかげで私は今、大学生活を有意義に過ごせていると感じます。(高室勇希)

▼私の好きな場所のひとつ、芸術学棟3階のラウンジ。高い天井から降り注ぐ日差しは毎日ことなる光りを見せてくれます。オープンな空間と自然光のライトの下で時には課題を取り組み、時には友人や先輩後輩たちと会話を弾ませます。そんな時ふらっと教授が寄ってくださったり。どんな場面にも適したこの空間が魅力的です。(長谷川裕子)

▼個性的な仲間が多く、皆の専門知識が異なるため、話すたびに自分自身の視野が広がる。今まで自身が興味のなかった分野にも関心のアンテナを張り巡らせることで、知識との出会いが増える。これが楽しい。(前山未来)

▼3年次編入生として、そして留学生として、初めての1年は忙しいところがありますが、充実な1年でした。昔、自分が経験した大学生活とまったく別なもので、最初は不安な気持ちがありましたが、いつの間にかすんなり受け入れられました。多分このようなオープンな、親切的な環境は、今学期が終わった時点で感じた芸学の魅力でしょう。(彭信文)

▼授業は座学ばかり。見られる光景はずっとパソコン上の文字にとらめっこしている学生たちばかり。美大の中の異様な空間。何しているのかわからないってよく言われるけど、なんでもしてるんです。脳内爆発は日常茶飯事。私たち意外とちゃんと美大生なんです。一番まともに見えるようで、もしかしたら一番カオスな場なのかもしれない芸学。芸学のギャップ、一度惚れたら戻れない。(黄夢圓)

▼私は、1年生の時に日本画と版画、2年生では写真と映像の授業を芸学で選択しました。今まで自分が経験したことのない“制作者、”という立場になることで、鑑賞者の立場ではなかった、”制作者、”として作品と向き合うことの苦勞を、身をもって実感しました。と同時に、作品を制作することの楽しさを知ることができたりと、芸学の様々なジャンルを取り入れた授業は、とても価値のあるものとなっています。(須山琴巴)

▼芸術学科はとても個性の強い学科だと思っています。学生ひとりひとりのキャラクター然り、制作した作品も然り。全員が自分の色を持っていて、それをどの場面でも惜しみなく出しているところが、私にとっての芸学の好きなところ。また、この「R」制作中でも起きましたが、たびたび課題の締切に追われて修羅場になることすらクセになってくるような、そんな学科です。(大谷桃夏)

▼「作品、少し失敗しちゃった…」っていうと「それも味だよ!」っていう。「レポート課題まだ残ってたわ」っていうと「私も」っていう。こだまでしょうか。いいえ、芸学生です。絵画、音楽、映画…方向性、得意分野や目指す先がバラバラなのは多摩美の中でも芸術学科が顕著なのではないでしょうか。みんな違ってみんないい、がここにあります。(島崎亜美)

▼入学してから芸学生のキャラの濃さ、知識の多さに驚かされてばかりです。3人いれば、どんな話題を振っても話を盛り上げてから返してきます。振らなくても面白くして返してきます。好きなことを話しているときの本当に楽しそうな顔を見るのが、話を聞く時の密かな楽しみです。(田波奏平)

▼程よい人数。学年ごとの人数は文部省が定める学級編成基準より少し多いくらいなので、同学年の全員とコミュニケーションが取れるため、これは卒業後の人脈に役立つと思います。そして、顔見知りになった芸学の友人たちは皆何かしらの個性を持っており、ある人の特技はよく当たるタロットカード占い。毎日が飽きない。(降幡ひかり)

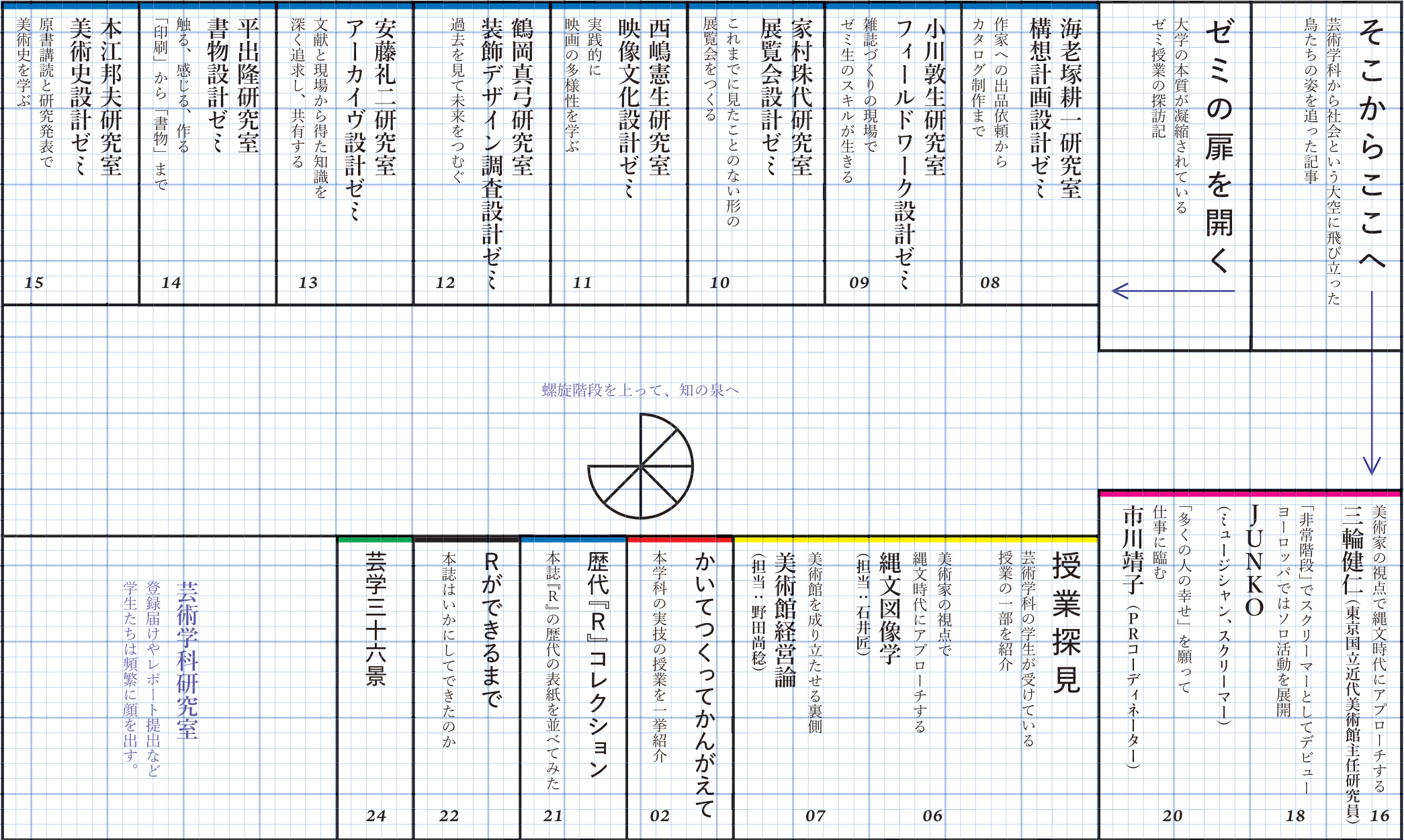
▼絵を描いたり彫刻や版画を彫ったり色々なことができます。教授陣は映画や現代美術、記事や写真、装飾の専門家が揃う。至る所に本棚があり、新旧様々な本が山ほどある。芸学棟は吹き抜けとなっていて、真ん中には多目的の机がある。その向かいには教授の部屋が並ぶ。大抵のことは芸学棟にいるとできるようになっている快適な空間だ。人が少ないため名前と顔が一致しないことがほばない。(森田智裕)

▼私が芸学で好きなのは同級生たちです。芸術学科に集まる学生というのもあってか、ジャンルは違えど皆好きなものに対する知識や愛が深く、自分の好きなものの話を好意的に聞いてもらえて、皆の好きなものを布教されるのも興味深くて楽しいです。お昼休みに皆で学棟3階のラウンジで昼食を食べながら交わす会話は、愉快で楽しくもあり、愚痴や情報の共有もできて日々の活力になっています。(山上琴乃香)

▼学生たちと本誌『R』の制作を始めて6年。毎年、個性的な美大生とつき合うことの大変さを実感しつつ、彼らの才能やパワーを受け止めることで、教員の側も生気を充足しています。ことに芸術学科は洋の東西や時代そしてジャンルを問わないさまざまな芸術オタクが集まっている一種の無秩序に大きな魅力を感じています。今年も本誌が発行できて本当に良かった。ふう。(小川敦生)

本誌の構造

本学八王子キャンパス芸術学棟の実際の構造をベースに、本誌の構造を描き出しました。目次の機能もあります。



「R」について

「芸術学科(芸学)」とはなにか。この問いに対して芸術学科の学生が自ら取材をし、記事にしたのがこの媒体です。研究、批評、キュレーションなど芸術に対して様々なアプローチをする実像が浮かび上がりました。なお誌名は、芸術を意味するフランス語「art」から取っています。

R

R [アール] 2018

2019年3月23日発行

発行＝多摩美術大学美術学部芸術学科

〒192-0394 東京都八王子市鍵水2-1723

Tel. 042-679-5627

顧問＝平出隆（多摩美術大学芸術学科教授）

編集長＝小川敦生（同）

編集管理＝多摩美術大学芸術学科研究室

編集＝寛まりな、佐藤仁奈、高室勇希、丹羽今日子、長谷川裕子、前山未来、彭信文、黄夢圓、須山琴巴、大谷桃夏、島崎亜美、田波奏平、降幡ひかり、森田智裕、山上琴乃香

デザイン監修＝須山悠里（suyama design）

印刷＝株式会社 八紘美術

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。